

4. 各研究部の実践

(1) 生徒理解研究部

① 研究の視点

生徒理解が行き渡れば、個々の生徒に適した援助、指導は可能となり、自ら学びとる態度の育成が期待できる。

② 視点についての考え方

生徒指導を進めるうえで最も基本となるものは、一人一人の生徒をとりまく諸条件をいろいろな角度からとらえ、それをもとに、どのように生徒を理解するかにあると思う。とするならば個々の生徒を理解するためのアプローチとして、共感的理解と客観的理解の併用があげられる。

前者は生徒とのふれ合いを重視し、教師と生徒が互いに相手を内包し合う姿勢、親和的な態度、心的作用の把握に役立ち、後者は、実態調査などによって生徒のある面を的確にとらえることができる。

こうした認識にたって本校では次のことがらを実践、現在継続中である。

ア、共感的理解を深めるために

- 生徒が積極的に教育相談にのぞむようにするための工夫
 - ・ 相談したい先生を生徒が選ぶ教育相談
 - ・ 不得意教科、教科学習上の悩みを解消するための教育相談
 - ・ 生徒に対する話しかけ運動の展開
愛することは理解することであると
いわれるが、相手を理解する手段として最も簡単なのは話しかけ、話し合うことである。私たちは、生徒あつての教師であるという現実をふまえ、全職員ができるだけ多くの生徒に接し、話しかける機会をもつことにした。

イ、客観的理解を深めるために

- AAIテスト、Step(生徒理解のための総合調査)、標準学力テスト
- 上記の諸検査結果が一枚の用紙で全容がわかる個人カードの作成

③ 研究の概要

〈話しかけ運動の実践例〉

生徒に対し、今まで通りの接し方で、1週間、話しかけた回数を記録する。

↓

記録するために全職員が、全校生徒の学級名簿をもつ。

↓

記入のしかたは、話しかけるごとに、○印などでチェックをする。

↓

話しかけるということは、単なるあいさつだけでなく、会話がとりかわされた場合をいう。(授業中の指名、部活動の指導、登下校など。)

- 話しかけた回数で集計した結果、多い生徒で60回以上8名で1日平均10回であった。
- 少なかった生徒については職員協議会で原因を検討し、20回以下の生徒、1年16名、2年12名、3年27名を選びだし、10月、11月の2ヶ月間全職員が意図的に話しかけ、ふれあいの機会を多くすることを確認した。
- 問題傾向をもつ生徒と話しかけ回数に関係だが、常に注意とか指導といった面で多く接しているせいか、話しかけも多くなっている。
- 特に問題はないと思われている生徒に対しては、案外話しかけ回数が少ない。そんな生徒ほど問題ではないか。そういう生徒が9~10名いる。

④ 研究の成果と今後の課題点

ア Step(総合調査)によって日ごろ特に問題がない生徒の中に指導を要する事項が見つかり、早期教育相談などで適切な対策が講じられた。

イ 生徒が先生を選ぶ教育相談の手続きにはまだ技術的な問題はあるが生徒には好評であった。

ウ 話しかけ運動は理屈ぬきがいいことであることが確認された。話しかけられたことによって、文句なく生徒は一人前に認められたことになる。今後も工夫をこらして実施していきたい。